

ミシェル・ジャルティ先生講演：テスト氏とレオナルドの頃のヴァレリー お話の流れ（今井メモ）

2005年10月26日（水）16時20分～18時00分：文学部大会議室

先生からいただいたテキストは全部で23段落から成ります。前半（1-15）は評論『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』（1895年）、後半（16-23）は短編『テスト氏との一夜』（1896年）について、執筆の経緯を中心にして、的確な資料と共に語られていきます。以下、各段落の話題を簡単にメモしておきますので、ご参考ください。引用一覧は別紙を御覧ください。

【1-15：『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』（1895年）について】

1 導入。「ラ・ヌーヴェル・ルヴェ」誌の編集責任者ジュリエット・アダン夫人のこと

2 何を書くか？ 天才的精神を想像すること

3 『序説』の狙い（普遍的精神（万能の天才）のモデル化） 兄ジュール・ヴァレリー宛手紙＋「私は或る人間を想像しよう…」（『序説』第二段落）

4 レオナルド的精神の形象（フィギュール）を作ること（執筆初期のタイトル：『レオナルド・ダ・ヴィンチの形象』）

5 最初の問いかけ＝同一化・モデル構築

6 一般詩学（作品生成論）の試み（『序説』第四段落）

7 理論的テキストであると同時に詩的・芸術的なテキストでもあること。エネルギーにみちたテキストであること（ブランショの言葉）。

8 「博識」を避けるといいながら、レオナルドブームによる十分な「博識」の供給があったこと

9 その他かなりの博識に支えられているが、たいてい、うまく隠されている。博識面で友人マルセル・シュウオップの助けがあったこと。シュウオップは献呈の相手となる。

10 執筆の様子（1895年1月から2月の頃、なかなか書けない様子など）。ジレンマ。アダン夫人の線で行くか、自分の路線で行くか？ドルーアンのもっともな感想など。

11 原稿提出。そのあと「事件」が起こる。シェフェールの手紙。アダン夫人による原稿の放置→誠実さに欠ける扱いにヴァレリー怒る。レニエの手紙（興味深い資料）。

12 二週間の空白後、1895年3月下旬、たてつけに手紙がくる。冒頭三頁分の書き直しを要求される。事の顛末。ヴァレリーはいったん別の雑誌への掲載の道を探るが、うまくいかず、結局『ラ・ヌーヴェル・ルヴュ』に落ち着く。

13 アダン夫人の指示に従っての書き直しはありえないというのがジャルティ氏の見解。その後、出版されるまでの経緯。

14 シュウオップへの献辞のこと

15 回りの友人たちの反応（特にマラルメの言葉は印象的）。

【16-23：『テスト氏との一夜』（1896年）について】

16 ここから『テスト氏との一夜』について。「肖像 portrait」の試み。発想の源＝モンパリエのファーブル美術館の経験（ブリュイヤが描かれた連作肖像画）。ドガ、ポワンカレ、セシル・ローズ他、様々なモデルが考えられる。

17 執筆経過、その前史、「デュパン回顧録」、デカルト的自伝の形式

18 テスト氏の人物造形（レオナルドとの対比において） 1895年末の危機と1896年春のロンドン旅行の終わりに経験した危機を経過して書かれた『テスト氏との一夜』はもはや若書きではないこと

19 ヴァレリーの分身としてのテスト氏（レオナルドの場合と同様） 鏡像関係

20 『テスト氏との一夜』仕上げに手間取る。「サントール」誌のアンリ・アルベールに催促され、9月18日、原稿を渡す。同人は一致して賞賛。

21 献辞について。ドガに捧げたかったが断られる。結局、友人の哲学者コルバシーヌに。

22 友人たちの反応。ヴァレリーの謙遜（＝矜持）

23 さしあたりの結論。いわゆる神話的な「ジェノヴァの夜」の回心（文学放棄と感情統制）以降も、ヴァレリーは文学を放棄せず『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』『テスト氏との一夜』を書き、詩も書いている。そして、感情の統制も完全ではなく、1895年末に深刻な感情的危機を経験している。ヴァレリーの第一期が本当に終わるのは、むしろ、陸軍省の書記官になる1897年である。忙しくなるが、ヴァレリーは書くことを続ける、そして、本格的に書くことへの大きな回帰がなされるのは、1917年の長篇詩『若きパルク』によってである。